

日本文学研究資料叢書

枕
草
子

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

枕草子

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

枕 草 子

昭和 45 年 7 月 30 日 発 行

昭和 48 年 10 月 1 日 3 版発行

編 者 日本文学研究資料刊行会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山 崎 誠

東京都千代田区神田神保町1-39

発行所 有精堂出版株式会社

電話 03(291)1521-3 番

郵便番号 101

井村印刷

3395 — 551614 — 8610

目次

『枕草子精講』解題	岡 一男	一
清少納言と枕草子 ―いつ、どんなふうにして、成立したか―	塚原鉄雄	一六
枕草子に於ける現代性	塩田良平	三三
草のいほり、玉のうてな ―清少納言、枕の草子―	五十嵐 力	四四
*		
枕草子の研究	有馬賢頼	五二
枕草子の形態に関する一研究	池田 亀鑑	六〇
枕草子本文整理札記	山 脇 毅	六九
枕冊子の本の研究 ―三巻本の批判を中心とする―	吉松智恵子	一〇三
「枕草子」、三巻本と能因本	村 井 順	一四五
*		
枕草子と拾遺集と落窪物語との成立序次に就いて	岩城準太郎	一六二

―新資料と研究の断面―

枕草子成立の事情	森吉左衛門	一六
枕冊子成立試論	田中重太郎	一七

*

清少納言の宮中奉仕年代	坂元三郎	一八
清少納言の家庭	森 洽蔵	一九
各地に於ける清少納言伝説の二三について	桜井 秀	二〇
清少納言と斑子女王	山岸徳平	二一
清少納言の作物と其の都人的特殊性	岩本堅一	二二
清少納言の生涯	岸上慎二	二三

*

「枕にこそは」——枕草子最終段の句解私案——	植松 安	二四
枕草子の跋文論	林 和比古	二五
枕草子段構成試論	半沢 トシ	二六
清少納言の漢才	目加田さくを	二七
十列と枕草子	山内益次郎	二八
清少納言と『万葉集』——三卷本第十一段「山は」を通して——	雨海博洋	二九
枕草子と女房日記との交渉	佐藤謙三	三〇

定子の寓話 一枕草子二三八段をめぐって……………大島秀男…二六五

*

解説……………三淵谷勝邦一明…二九五

枕草子研究参考文献……………三二

『枕草子精講』解題

岡 一 男

序 説

『枕草子』を読むについて、予備知識として初めに頭の中に入れておくべき事は先ず、

(1) 明治以前の国文学の中で最も立派なものは平安朝の文学と江戸時代の文学とである。殊に平安朝の文学は、立派な特色を備えていて、活きていると同時に美しく磨き上げられている点において、比類なき地位を占めているものである。『枕草子』はこの時代の中の全盛期の産物で、『源氏物語』と相並んで双璧とも称せらるるもの、而して我が古今の文学のなかの最大傑作の一つであるという事。

(2) この草子が清少納言という一癖ある不思議な女性——和歌の名家のむすめと生まれ、ある男との間に一人の男子をもうけて後、才色兼備の中宮に仕え、その庇護のもとに公卿・殿上人を白眼視してはしいままに才華をあらわし、中宮崩御の後、窮迫しながら傲岸な生涯をおえたという無類の閼歴をもった女性——博学で批評眼が鋭く、洒落気があって氣位が高

く、優雅な趣味と皮肉な弥次馬性と勝手氣随な放浪性とを同時に備えた面白い女性の——言いたいことを自由に言った作であるという事。

(3) この草子が随筆文学の魁をなしたもので、のみならず最初であると同時に最善のものであるという事。

(4) わが国にこれまで現われたおもなる思想は、おおまかにいうと、公卿道・武士道・町人道・紳士道の四つであるが、この草子は公卿道一面の神髓を写したもので、平安朝における宮廷生活の美醜両面をあざやかに具体的に描いた主なる作の一つであるという事。

(5) 平安朝の文章が、優美一方の単調なるもので、なよなよと長々しくひっぱる傾きがある、その間にあって、この草子が簡淨で強いという特色を備えているという事。

などであらうと思います。——とは、先師五十嵐力博士が、三十年前早大文科における『枕草子』開講の序に述べられた処であるが、それはこの草子をはじめて読もうとする方々に、今なお真である。尤も(4)にはプロレタリア道を加えてもよいだろうというような、時

代の変化もあることはあるが。ところで、博士は『枕草子』は面白い。『枕草子』を書いた清少納言の人物は更に面白い。けれども平安朝という無類不思議な大きな時代が、清少納言に宿り、清少納言を使って、時代自身の姿を描かせたのだと思うと更に面白いように思われる。」といっておられるが、『枕草子』を真に理會しようと思うならば、その作者である清少納言とその時代について、できるだけ精確な知識と洞察をもっている必要がある。それを次ぎに述べてみる。

第一章 『枕草子』の時代環境

『枕草子』が清少納言によって著作されたのは、平安朝中期の一条天皇の時代である。そこではじめに日本文化史の上からみた一条朝というものを回顧してみよう。天皇は円融天皇の第一皇子で、御母は摂政藤原兼家の女詮子である。花山天皇の御時東宮に冊立され、寛和二年七歳で即位され、寛弘八年六月御讓位、まもなく崩御された。御齡三十二歳でおなくなりになったのだから、御夭折と申し上げべきだが、御在位期間は二十五年の長きにわたり、宝祚の久しいこと、醍醐天皇以来絶えてない処であった。それに天皇は學術を好み、詩文・音楽に卓越され、政治に御心をとめられたために、当代の文化は延喜・天曆を圧して燦然たるものがあつた。特に諸道の人物の輩出は驚くべきで、大江匡房は、『統本朝往生伝』に、その當時を回顧して、

親王はすなわち後中書王（具平親王）、上宰はすなわち左相（藤原道長）・儀同三司（藤原伊周）、九卿はすなわち右將軍実資・右金吾・齊信・左金吾公任・源納言俊賢・拾遺納言行成・左大丞扶義・平中納言惟仲・霜台相公有国等之輩、朝に廊廟に抗

議し、夕に風月に預り参す。雲客はすなわち実成・頼定・相方・明理。管絃はすなわち道方・済政・時中・高遠・信明・信義。文士はすなわち匡衡・以言・齊名・宣義・積善・為憲・為時・孝道・相如・道济。和歌はすなわち道信・実方・長能・輔親・式部（和泉式部）・衛門（赤染衛門）・曾禰好忠。画工はすなわち巨勢弘高。舞人はすなわち大伴兼時・秦身高・多良茂・同政方。異能はすなわち私宗平・三宅時弘・伊勢多世・越智経世・公俊恒世・参春時正・真上勝岡・大井光遠・秦経正。近衛はすなわち下野重行・尾張兼時・播磨保信・物部武文・尾張兼国・下野公時。陰陽はすなわち賀茂光榮・安部晴明。有驗の僧はすなわち観修・勝算・深覚。真言はすなわち寛朝・慶門。能説の士はすなわち清範・静昭・院源・覚縁。学徳はすなわち源信・覚運・実因・慶祚・安海・清仲。医方はすなわち丹波重雅・和气正世。明法はすなわち允亮・允正。明経はすなわち善澄・広澄。武士はすなわち満仲・満正・維衡・致頼・頼光、皆是れ天下の一物なり。

と述べている。（このうち右傍に圈点を附したのは、『枕草子』に活躍しているか、もしくはその名を見えている人々である。）

ところで、大江匡房は漢儒だから、どうしても男尊女卑であり、国文学にうとく、右の文の人々のなかに、世界最古の偉大な長篇小説作家といわれる『源氏物語』の著者の紫式部や、わが国における随筆文芸の天才的な創始者である、『枕草子』の著者の清少納言やをも逸している。その他、世界文芸史的にいつて最初の私小説である『蜻蛉日記』の著者の道綱の母（摂政兼家室）も、この朝の中頃まで生榮しており、清少納言もその近況を『枕草子』に録している。また、馬内侍・小大君・御形の宣旨・賀茂保憲女・伊勢大輔な

どの才媛、惠慶・盧主・安法・源賢・道命（道綱の子）などという歌僧も輩出している。そして勅撰集としては『拾遺和歌集』、漢詩文集としては『本朝麗藻』、やゝ遅れて『本朝文粹』が著作され、当代の詞苑の豪華を誇示している。なお、『宇津保物語』の完成や『落窪物語』の出現も、この朝のはじめにおいてであり、『高光日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』などの日記文芸の創作も旺盛であり、その他、私家集・私撰集にいたっては、一々数えあげることができぬほどである。個人の詩文集についてもまた同断である。

この一条朝における文芸隆盛については、清少納言も、

若き人の、なにがし、くれがしの集、物語書きあつめ、ささげて読みなどすること、いとをかしきことなれ。事多く、明け暮れのおはやけ事しげき殿ばらの上たち、受領のささとのおとなしかるべき北の方などもなどの、営む事多かるだに、その事棄てぬいとをかし。まして、つれづれとうちかしづかれたらん人人のむすめをば、何事をして明かし暮らすべき。そは世の中に物語・歌などは読みても、「そこもととは、とあり、かかり。」と心得がたきところを見もどきて、ほめにもくみもすることさかひあれ。（前田家本『枕草子』）

（訳）若い人たちがだれかれの集や物語の類などを写しあつめ、有難そうに両手にささげて読みなどしているのは、たいへん面白い風景である。いろいろ用事が多く、朝夕の宮廷つとめの忙しい高官連の奥方たちや、国司たちの私邸・留守宅の相当年輩の夫人たちなどの、家事や何やに追われている人々さえ、この歌集・物語などの冊子づくりをやめないのは、たいへん面白い。まして、することもなくおひなさまのように大切にあげられている良家のお嬢さまなどは、（こんな冊子づくりでもしなければ）、何事をして夜を明かし、日を暮らすうぞ。それは世間一般に物語や歌を読んでも「そこんところは、ああなのだ」

「こうなのだ」と、不審な箇處を指摘して批判して、ほめもし、悪口もいふのが意義があるのだ。

といっておるほど、当時貴族社会では上下を問わず、冊子作りが流行していて、宮廷、摂関家で特にそれが大掛りに行われていたことは、『源氏物語』の「絵合」「螢」、『紫式部日記』寛弘五年十一月の条の中宮の御前の冊子づくりに顯著であり、『赤染衛門集』にも道長が熱心に物語の新作を歓迎していた趣が見えている。また和歌の批判の盛んであったのは、歌合の流行でわかるが、物語の批判の盛んだった趣も、叙上の書のはかに、『藤原公任集』『枕草子』などに見えている。それとともに、こういう文芸熱が男性よりも女性にさかんであり、女性が文壇をリードしていたのがこの一条朝の特性であった。すなわち平安朝文学を一口に女性文芸というが、それはこの一条朝を中心とする約百年の間で、その前後の文壇には小野小町や伊勢や、また讃岐典侍や右京大夫のごとき天才女性がなかったわけではないが、文壇の主流は在原業平や紀貫之や、西行や俊成などの男性の作家が占めていたのである。

それでは、どうしてこの一条朝において、かくも女性文芸が絢爛と花咲いたか、それを社会経済史的に簡単に叙べてみよう。

孝徳天皇の朝に中大兄皇子^{天皇}及び藤原鎌足によって断行された大化の改新は、中国の律令制度を移植することによって、公土公民主義を採用し、従来の貴族・豪族による土地及び人民の私有を原則的に禁止し、人材登庸に関しても、できるだけ門閥の独占を避けようとしたものであったが、種々の情実があつて何れも徹底できず、貞観・延喜頃から、藤原氏による摂関政治と、権門寺社による荘園経済が発展してきて、律令政治や班田制度は形骸にすぎぬものとなつていった。荘園は権門寺社の私有地として、奈良朝時代から存在

していたが、これは国司の支配をうけ、租・庸・調を輸すこと、殆んど他の班田と異なることがなかったが、平安時代になって、新たに荘園の租税を免じ、住民の賦課を減ずる慣習ができ、弘仁以降、太政官符・民部省符によって、この特典が与えられ、のちには簡単に国司の免判をもって官符・省符に代え、あらゆる課役を免除されることとなったものであるから、院官諸家及び寺社の荘園にしてこの特典をうけぬはなく、いったんこの特典をうると、本免と称し、本免以外の公田を蚕食し、これを加納・出作と称し、のち本免のうちに繰り入れて、荘園の拡大をはかった。そして荘園の維持・拡大には、中央の権門の勢力による便としたから、地方人の豪富なる者は、自己の土地領主権を中央の勢家に名義上寄進し、これを本所・本家とし、もとの領主・地主は領主職を保留して、預所・荘司の職掌を子孫に伝えた。これによって受寄者たる権門勢家は受寄の領地から一定の年貢・労力を徴発しえ、また寄進者は権門勢家の庇蔭によって自己の領地の保全・拡大をえた。かつ受寄者と寄進者とは双務契約であるから、寄進者は受寄者たる権門勢家が勢力を失墜すると、他のより有力なる権門勢家に転讓する権利をもっていた。従って中央貴族中最も勢力ある摂関家へ天下の土地が集中するのは当然であり、また落魄した貴族の荘園が次第に霧散してしまふことも道理であった。

この荘園の拡大は、公領の減少を意味するが、これはまた国家經濟の欠乏を意味する。そのため大内裏が天徳以来、しばしばの火災ごとに規模が狭少になるし、殿舎が朽廃のまゝにまかされて、太政官の庁の天井がくちて蜈蚣を落し、屋根裏に蜂の巣がぶらさがり、豊樂殿は姑蘇台の如しというさまであり、殿上の合子にはなめくじが這うていたらくである。それに官吏の俸給も十分には支払われ

ず、勢力のない、従って荘園をもたない京官は衣食にも差支えるほどであった。ただ地方官は、荘園の免判、その他絶大な権力と住民をもっていたから、私腹をこやすことができ、また租・庸・調をこまかに巨富を致した。ところで、京官・地方官の任免はもろん摂関の意志によるから、摂関家の經濟的優勢の圧倒的なことはいうまでもなく、皇室の財政もそれに依存するに至った。また政治的にも、当時大社・大寺、三位以上の公卿の家には政所を置き、事務を執っていたが、天下の政權が藤原氏に帰するや、摂関家の政所が政治の中心となり、政所から出る下し文・御教書が宣旨または官宣旨に代わって重要な政治的意味をもつてき、朝廷は単なる儀礼的な存在となった。その上、円融天皇の貞元元年五月の内裏火災以来、天皇はしばしば摂関家を皇居とされ、これを里内裏と称したが、当時この皇居の火災は頻繁で、外戚の里内裏も頻繁となり、公私が混淆した。一条天皇の朝のごとき、内裏は長保元年六月、三年十一月、寛弘二年十一月、都合三度の炎上があり、寛弘二年には左大臣道長の東三条第に遷幸、翌年三月一条院入御、六年十月一条院また焼亡、道長の枇杷第遷御、翌年十一月新造一条院に移御せられ、そこで御位を三条天皇に譲られた。

こういう風であったから、摂関、或いは執政の臣が天子を擁して、天下の政治を攬ることは易々たるものであった。そして摂関、或いは執政の臣となるには、摂関の家柄に生まれるのは当然として、その身は天皇の外祖父、或いは外舅の地位にあらねばならぬ。そのためには自己の子女を後宮にすすめ、他の后妃を圧して天皇の寵倖をえしめねばならぬから、子女の教育や、その侍女に才媛を集めることに汲々とし、ここに空前の女流文芸隆盛の時代を現出したのである。また摂関の地位につくための陰謀術策はいたらざるな

く、いやしくも政權に近づく危険のある他氏は、大伴氏も菅原氏も源氏もまた皇親も排斥され、はては兼通と兼家、道隆と道兼、伊周と道長とのごとき兄弟、叔父・甥の間柄で血で血を洗う、凄絶な権力争いをした。殊に兼家は、自分の女のお生み申した一条天皇を早く御位につけたいたために、花山天皇が最愛の女御低子をなくして悲しんでいられるに乘じて、たくみに御出家をおすすめ申し、一条天皇を御位につけ、おのれは外祖父として摂政となったのであった。

ところが、正暦元年五月兼家は病のため入道し、長男の内大臣道隆が関白となり、次いで摂政となった。この年の正月二十五日道隆の女の定子が入内し、二月女御となり、十月中宮に冊立された。この定子中宮に清少納言は仕えたのである。道隆は長徳元年四月十日、当時流行の疫病のために薨じ、弟の右大臣道兼が関白職を襲うたが、これまた時疫のため七日にして薨じ、その弟の権大納言道長が内覧の宣旨を蒙った。天皇は中宮を愛し、内大臣伊周道隆と関白職をつがせたく思われたが、道長は姉の東三条院子と深く結び、東三条院が母后たる地位によって、一条天皇を動かし、道長が執政の地位に上ったのである。その後、道長と伊周との抗争は事毎に激しくなったが、翌年伊周が自棄のあまり、弟隆家とともに花山院不敬事件を惹起するに及んで、伊周は太宰権帥に、権中納言隆家は出雲権守に貶せられ、中宮定子また御落飾なさるという変が生じた。一方、道長は長徳元年右大臣、翌年左大臣に陞り、その政權は確乎たるものになった。長徳三年伊周・隆家は召還されたが、もはや昔日の勢威はなかった。

定子中宮は長徳二年五月御落飾、のちまもなく復飾、十二月皇女脩子内親王御誕生、天皇の御寵愛を専らにしていられたが、長保元年十一月一日、左大臣道長の長女彰子が入内し、次いで翌年二月彰

子は中宮となり、定子は皇后に冊立された。これは定子皇后に少なからぬ精神的打撃を与えたことと思われる。皇后はなお長保元年十二月敦康親王御誕生、次いで二年十二月嬬子内親王を御誕生あったが、十六日ついに産事によって崩御あそばされた。御年二十五。

『枕草子』にはこの薄倖な皇后及びその一家を驚くべき明朗な筆で輝かしく描いている。特にこの書の記事が長徳元年から長保二年へかけて豊富詳細であり、それが皇后一家の恐るべき悲劇の時代であったのに拘らず、いささかもその暗い影がさしていいない処に、清少納言の左大臣道長の勢威をもとせぬ、たくましいファイティング・スピリットと、皇后定子にささげた美しい純情のひらめきをみるであらう。

なお、左大臣道長の長女の彰子中宮は、寛弘五年に後一条天皇を、六年に後朱雀天皇を御誕生、道長は三条天皇、後一条天皇の朝に摂政太政大臣となり、ついで長男頼通に摂政を譲り、法成寺に入道するのであるが、この御堂殿の栄華は空前絶後のもので、一家三后を出し、長男の頼通は摂政、教通は関白、頼宗は右大臣に陞った。天下の莊園の大半はこの一家にあつまり、その豪富顯榮は前古比類するものがなかった。そして彰子中宮は、のち上東門院と申ししたが、ここには紫式部・赤染衛門・和泉式部・伊勢大輔・小式部内侍・大式三位らの才媛が多く集まった。しかし、概していうと、赤染衛門や紫式部や和泉式部らが傑作を出したのは、一条天皇の時代であり、三条天皇以後は文化が固定し、停滞したようであった。

これをもつてみると、清少納言は摂関政治・荘園経済の上昇・発展の時代に活躍し、潑刺たる創作のエネルギーを発揮したのと言える。——すなわち重ねていうが、摂関政治はいちめん律令国家の權威によりつつ、大貴族が天皇の外戚たる地位をしめることによつ

て、他面地方豪族と自由契約による主従関係を持ち、その莊園の寄進を受けたり、その任命した国司と結託して自己の莊園を拡大したりして、公領を浸蝕していたが、中小貴族も大貴族と、或いは地方豪族も中央の貴族と、結婚・主従などの関係を通じて私的因縁をむすび、自己の官職や所領の保持、或いは發展につとめており、摂関家の経済が皇室に優位し、官人の生活が多く莊園に依存し、その俸祿が名目的になるに及んで、古代の国家主義や帝王神權思想が衰え、個人主義的・自由主義的・現実主義的傾向が著しくなった。特に摂関政治にともなう外戚政策や後宮政策は女性の地位を高め、その物質的・精神的なかしづきは驚異すべく丁寧なものであった。尤も上層の貴族の姫君たちは、深窓にあって后がねの家庭教育をされ相当束縛をうけたために、その文芸的才華はあまりみるを得ないが、国司階級の女性には、富と閑暇にめぐまれ、都会と地方、宮廷・摂関家と一般庶民の生活に自由に触れ、またその結婚相手を上層から下層まで任意にえらびえ、摂政兼家の室の時姫や前播磨国守の娘の明石の上のごとく、中宮の母、或いは天皇の外祖母の榮位に昇ることもできるのである。そこで美男の貴公子を主人公とした恋愛物語が歓迎され、あるいは上層の貴公子との恋愛を回想した家集・日記がひろく愛読され、それらが貴族社会の女性たちに人生観照の上にも、また恋愛や結婚における実践上の参考ともなったのである。

清少納言が定子中宮に出仕したのも、単にそれによってうる俸祿が目的でなく、むしろ中宮の親昵からうる自家の莊園の維持や兄弟の立身のためであり、それ故に中宮と彼女との間にあいつう私的な美しい交情が結ばれたのである。そうしてこの中宮の彼女にたいする余りなまでの御愛情が、彼女をして自由にその天才を発揮させる因縁となったのである。ここで我々は、清少納言の生涯を述べるべ

きであるが、その前に彼女の文芸史的地位をいうことにする。

今、平安朝四百年の文芸史を概観すると、最初の百年は、嵯峨天皇の弘仁年代を中心にして詩文が盛行し、次ぎの百年は醍醐・村上の二天皇の延喜・天曆の年代を中心にして和歌が隆盛であり、第三の百年は、一条天皇の長保・寛弘を中心として散文が全盛であり、第四の百年は院政期を中心として、歴史文学が勃興したと概説される。その平安朝の散文文芸の絶頂に位置するものが、清少納言の『枕草子』であり、紫式部の『源氏物語』である。また、特に散文文芸という近代の観点からすると、『源氏物語』にはまだ前代以来の旧辭の口吻が残っており、和歌的抒情や修辭がもちいられていて、純然たる散文と言えないが、『枕草子』は知性的な感覚的な散文で書かれていて、わが国文章史におけるエポック・メイキングな作である。この事は、『竹取物語』や『伊勢物語』『古今集』序『土佐日記』『蜻蛉日記』『宇津保物語』などの文章と比較すると、すぐわかることで、これらの文字は旧辭や和歌や漢文における修辭法にわざわざいされたり、過度の抒情に流れたりして、対象を適確に印象的に表現しえず、言葉の綾をもてあそんだり、イー・ジイ・ゴーン・グに感傷に溺れたりしている。和泉式部のごとき、和歌においては万葉歌人にはじない偉大な歌人で、おそらく在原業平・西行以上の天才をもっていたかと思われるが、その『日記』は、あまりに感傷的にすぎ、自己の恋愛生活を客観的に描くに失敗している。すなわち閨怨といった連綿たる情緒や、年若な高貴な愛人の熱愛に絆されてゆく中年の女性の愛慾心理というものは、執拗なまで告白されているが、その場面の描写や、愛人の性格の分析が足らず、自己反省も氣分的で、その恋愛生活が全体として明確に形象化されていず、概念的な、體化的な記述が案外多く、ただその和歌の奔放で天才的

なことによって、この『日記』の芸術的価値がささえられているのである。この意味において清少納言は、紫式部・和泉式部に劣らない、独自のすぐれた文芸的領域を、彼女自身でひらいたといわねばならない。

第二章 清少納言の性格と生涯

『枕草子』の作者は清少納言である。彼女は『日本書紀』の撰者舎人親王の後裔で、清原深養父という名高い歌人の曾孫、『後撰集』を撰んだ、更に名高い梨壺の五人のひとり清原元輔の晩年の女である。彼女は円融天皇の天元元年頃、当時十八歳であった橘則光に嫁いで、則光を産んだ（三卷本『枕草子』巻末奥書勘物参照）。則光は東宮（花山天皇）の御乳母の子であった（『小右記』長徳三年四月十七日条）。東宮は歌を好み、元輔やその子の戒秀を寵愛されたから、自然彼女と則光との関係もできたことと思う。その後、彼女はやはり東宮をかこむ歌人グループの一人藤原実方に想われた。それは花山天皇の寛和二年六月十八日の藤原濟時の小白河殿の法華八講のあとのことであろう（『枕草子』三二段）。この年の正月、父元輔は肥後守となり、兄の戒秀は殿上法師とされた。また姉のついで藤原理能（『蜻蛉日記』の著者の兄）の妹婿藤原為雅の女は、時の執政権中納言義懐の室であった。そういう関係であったから、清少納言が小白河の法華八講を聴聞に出掛け、途中で退出しようとした時に「や、や、罷りぬるもよし」と義懐から「方便品」（『法華経』の秀句もじりに声をかけられ、彼女も人をして「五千人の中には入らせ給はぬやうあらじ」と逆襲させて帰ったのである。実方は当時兵衛佐、濟時の甥で、この八講の時にも、家の子として自由に出入していた。そのことを記した『枕草子』の文面では、まだ彼

女と関係がなかったように見える。その後、元輔が肥後に赴任するにあたって、彼女を実方に托したと見え、『拾遺集』恋四に、

もとすけが婿になりて朝に

時のまも心は空にあるものをいかで過しし昔なるらむ

という歌が藤原実方朝臣の作としてみえている。尤も図書寮蔵の『異本拾遺和歌集』には詞書が「中将もとすけ（藤原元輔。極官は参議治部卿）が婿になりての又の朝に、兵衛佐藤原のぶかた（信賢・五位・左兵衛佐）」とあるので、実方が清原元輔の婿となったのを疑う説もあるが、『拾遺集』の詞書には故人の官名は極官を記し、また兵衛佐のごとき卑官の官名は附さないのが凡例となっているから、『異本拾遺和歌集』の詞書は後人の誤註がまぎれて入ったものであろう。清少納言は多分前夫の則光が年下で無骨者だったもので、彼から別れたのであろう。そのうち父の元輔は、一条天皇の正暦元年六月に八十三の高齢で歿した。

しかるに、実方も多情であてにならず、兄の致信は太宰少監で、微官の弟宗高とともに九州にありといった風に心細かったので、父の旧故の勧めがあったのであろう、正暦四年二月頃、一条天皇の中宮定子に出仕した（梅沢和軒氏「清少納言と紫式部」、有馬頼賢氏『国語国文の研究』第二十七号参照）。彼女は重代の歌人元輔の女として宮仕え以前から有名であったので、中宮の御寵愛が深く、伊周・行成・齊信・公任・俊賢などといった若き才学ある顯官からちやほやされ、宮中では女王のような羽振りであった。前夫の則光も義兄妹の縁を結ぶ、実方との交情もたまさかではあるがまた恢復し、その陸奥に下るまで続いた。清少納言が『枕草子』の初稿をものしたのは、実方が陸奥守になった翌年の長徳二年の頃である。それはたちまち伊勢守源経房などによって宮廷に流布した。実方との関係

は、『異本清少納言集』の左の歌によって、実方の晩年まで続いたことがわかる。

実方の君の陸奥へ下るに

床も淵ふちも瀬ならぬ涙河袖のわたりはあらじと思ふ

清少納言の実方に与えた歌は他にもあるが、才気煥発で男子拮抗の強い彼女も、彼にたいしてだけは実に涙もろい女性的な姿態を示している。

実方は長徳四年任地で歿したが、その後彼女の良人となったのは、摂津守藤原棟世である（『続群書類従』清原氏系図）。棟世が摂津守に任ぜられたのは、私の考えでは、長保元年正月の除目においてである（『小右記』同年七月三日条参照）。彼は一・二年その職にいて歿し、寛弘元年以前に説孝がこれに替わった（『日本紀略』同年二月条）。『枕草子』を見ると、「便なき処にて、人に物言ひけるに、胸のいみじう走りけるを、『などかくある』といひける人に、――逢ふ坂は胸のみつねに走り井の見つくる人やあらんと思へば」（二八二段）とか「細殿に便なき人なむ、暁に笠して出でけると言ひ出でたるを、よく聞けば我が上なりけり。地下などいひても、めやすく、人に許されぬばかりの人にもあらざるなるを」（一九七段）などあるのは、この男のことかと思う。棟世は天曆以来の旧吏で老年ではあったが、諸国の守を歴任して富裕であったから、彼女もこの男に老後を委ねることにしたのであらう。これらの章段が『枕草子』の巻末にあるのは、その関係が晩年であったことを示唆しているようである。

ところで、長保二年十二月皇后定子が崩じたが、翌年彼女は摂津に下った。そこで、彼女は『異本清少納言集』にあるように、一条天皇から御見舞の勅使を頂いた。

津国にある頃、内裏の御使に忠隆を

世の中をいとふ何その春とてや……………

逃るれど同じ難波の方なればいづれも何か住吉の里

これで見ると、住吉のすまいも余り面白くはなかったと見える。それでお使いがあったままに京に上り、左大臣道長の夫人鷹司殿（倫子）からの勧めもあり、故皇后定子の第一皇子敦康親王も養われていらしたので、中宮彰子に仕えた。彼女は住吉にある頃、故皇后の御生前をお偲び申して、『枕草子』に長保元・二年のことを多く書き加えた。それが宮中に流布したのも、この頃であつたらう。寛弘二年十二月二十九日の夜、紫式部が新たに中宮彰子に仕えるようになり、たちまち中宮の寵をえた。で、清少納言はひどく不愉快になり、月の輪の故元輔の旧邸に隠退した。藤原公任がその退仕を惜しんだ歌が、彼の集にある。

清少納言が月の輪に帰り棲む頃

ありつつも雲間にすめる月の輪をいくよながめて行き帰らるん

なお、和泉式部は彼女の唯一の同性の友というべきで、その歌を『枕草子』（五八段「草の花は」）にひいており、その交情は晩年まで続いた。『和泉式部集』（巻三）に、

師走のつごもり、清少納言に

(1) 駒すらもすさめぬ程に老いぬれば何のあやめも知られやはする

(2) すさめぬにねたさもねたしあやめ草ひき返しても駒かへりなん

五月五日菖蒲の根を清少納言にやるとて

(3) これぞこの人のひきける菖蒲草むべこそねやのつまとなり

けれ

かへし

(4) ねやごとのつまにひかるほどよりは細くみじかきあやめ
ぐさかな

またかへし

(5) さはしもぞ君は見るらん菖蒲草ねみけん人にひきくらべつ

同じ人のもとのりをおこせたりければ

(6) まれにても君が口より伝へずばときける法にいつかあふべき

という贈答がある。(2)(4)の清少納言の返歌を見ると、彼女が老後なお昂然と「をかしう誇りか」(『柴花物語』『鳥辺野』清少納言評)であったことがわかる。同じく対手の歌をやつつけるにしても、(5)の和泉式部の歌はやさしいではないか。(6)によると、少納言は晩年尼になったようである。またこの海苔は故棟世の旧領の摂津から送って来たように思われる。なお、和泉式部は寛弘六年の葵祭の頃、中宮彰子に出仕したのであるが、(1)(3)の贈答は宮中の局においてのようだから、少納言は月の輪退隠後も中宮または鷹司殿の召しによりしばしば宮中に奉伺したように思われる。彼女が棟世との間にもった一女が、上東門院に仕えて、小馬命婦といったのも、母の縁によると思われる(『圖書寮本「範永朝臣集」』)。

ついでに和泉式部の後夫は大和守藤原保昌という武人であるが、清少納言の兄の致信は、その郎等であった。彼は不良性を帯びており、ならず者のような性行だったらしく、後一条天皇の長和六年三月十一日、白昼に右馬頭兼淡路守源頼親という、これまた仕様のない殺人上手に殺された(『御堂関白記』、『古事談』(第二臣節)に、

頼光朝臣遣^シ四天王等^ヲ、令^シ打^ツ清監之時、清少納言同宿
ニテアリケルガ、依^ル似^シ法師^ノ、欲^ス放^ス之之間、為^シ尼由云エ
ントテ忽^チ出^デ開^キ云々。

とあるのは、桜井秀博士が説かれたように、この時の話であろう。清監は致信らしく、頼親は頼光の弟だからである。彼女が後一条天皇のはじめには尼となっており、相当したたか者になっていた趣が見えていて面白い。『御堂関白記』には致信の家を「六角小路与福小路、侍小宅」といつているから、彼女は月の輪にばかり籠って、折々京に出て来ていたように思われる。また次兄の宗高はもと豊後の国に住んでおり、入道していたが、還俗して長徳二年九月四日但馬介に任ぜられている(『大日本史料』第二編之二、「豊後清原系図」岩清水尙氏説)。三兄の戒秀は寛弘元年十二月二十一日当代の権御導師に拔擢され、祇園別当などかねていたが、三条天皇の長和四年閏六月十二日、落雷のため自宅で寂した。彼は花山院の殿上法師としてしばしば院の御使を承わって、左大臣道長邸に伺候しており、永谷の僧として藤原行成とも親しかった。

清少納言の弟の為成は雅楽頭で、後一条天皇の頃まで生榮していた。その他、彼女には藤原理能に嫁した姉もあったが、晩年は頼る兄弟なく、随分悲惨だったらしく、『赤染衛門集』に、

元輔が昔すみける家のかたはらに清少納言棲みし頃、雪のいみじく降りて、隔ての垣もなく倒れて見渡されしに

あともなく雪ふる里の荒れたるを何れ昔の垣根とかみる

とある。なお『古事談』(第二臣節)の

清少納言零落之後、若殿上人アマタ同車、渡^リ彼宅^ノ前^ノ之間、宅体破壊シタルヲミテ、「少納言無^クニコソ成^リニケレ」ト車中ニ云ラ聞テ、本自棧敷ニ立タリケルガ、簾ヲ擲上ゲ、如^ク鬼形之

女法師、顔ヲ指出^{シテ}云々、「駿馬ノ骨ヲバ不^ス買^ハヤアリシ」ト云々。
(燕王好^シ馬買^ハ骨事)

という人口に膾炙した話も、まんざら跡なしごとでもなさそうである。ただ『無名草子』にある、「はか／＼しきよすがなどもなかりけるにや、めとの子なりける者に俱して、はるかなる田舎にまかりて棲みけるに」は、うそらしく、讃岐の琴平神社内の墓も後世の好事家のしわざらしい。『誓願寺縁起』にいうように、この寺で死んだかどうかは判らぬが、京都で歿したことは、ほぼ想像できる。遺著に『枕草子』及び『清少納言集』があるが、『松島日記』というのは、後人の仮託である。『玉葉集』雜五、『統千載集』雜中に、左の歌があり、彼女の晩年の悲懷を伝えている。

月をみて

月みれば老いぬる身こそ悲しけれつひには山の端にや隠れむ

老の後籠りゐて侍りけるを人の訪ねてまうで来たりければ

とふ人にありとはえこそ言ひ出でね我やは我と驚かれつつ

第三章 『枕草子』の題名・原形・成立年代

ところで、清少納言が『枕草子』をはじめて書いたのは、その跋文に(三巻本による)

(1) 宮の御前に内^{うち}の大臣^{おとぎ}の奉り給へりけるを、宮「これに何を書かまし。上の御前には史記といふ書をなむ書かせ給へる」など宣はせしを、清「枕にこそは侍らめ」と申ししかば、宮「さば、得てよ」とて賜はせたりしを、あやしきをこよやなにやと尽きせず多かる紙を書きつくさむとせしに、いと物覚えぬことぞおほかるや。

(2) 左中将まだ伊勢の守と聞えし時、里におはしたりしに、端

のかたなりし疊をさし出でし物は、この草子載りて出でにけり。まどひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いと久しくありてぞ返りたりし。それよりありきそめたるなめり。とぞ本に。

とあるによると、伊周の内大臣時代で、経房の伊勢守の時代にはいちおう完成していたと考えられる。ところで『勸物』によつて、伊周が内大臣に任ぜられたのは、正暦五年八月二十八日で、太宰権帥に降されたのは、翌々年の長徳二年四月二十四日である。また左中将源経房が伊勢権守を兼ねたのは長徳元年正月十三日であり、これを去つたのは翌年の十二月だと思われるから(『公卿補任』)、『枕草子』の初稿本は大体この間に出来たと推定される。殊に現存本によると、長徳元・二年の記事が比較的に充実しているが、これはその執筆期間に属していたからと想像されるので、経房が彼女をおとずれ、『枕草子』を持ち出したのは、長徳二年の秋冬の間と考えられる。

なお『枕草子』の原形について、ある学者は現存本の「春は」「頃は、或いは「すさまじきもの」「たゆまるるもの」「人にあなづらるるもの」「にくきもの」「過ぎにし方恋しきもの」「心ゆくもの」などという類纂的部分のみで出来ており、その他の随筆的部分、或いは日記的部分は後年の増補で、原本は堺本、あるいは前田家本のよる類纂本で、両者巻冊を異にしていたのを、流布本はそれが後世散乱したのを雑纂形にまとめたものであるといっているが、現存『枕草子』の跋文に、明らかに(三巻本による)

(3) この草子、目に見え、心に思ふことを、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなう人のために便なき言い過ぐしをもしつべき処々もあれ

ば、よう隠し置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ。

と書いていて、その中には隨筆的部分・日記的部分もあって、そして人の名譽に関する過言もあったとわかり、更に(1)の次ぎに、

(4) おほかた、これは世の中にかしきこと、人のめでたしな

と思ふべきことを振り出でて、歌などをも、木・草・鳥・虫をもいひ出したらばこそ、「思ふほどよりはわろし。心見えなり」とそしられぬ。ただ心一つにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人並々なるべき耳をも聞くべきものかと思ひしに、「はづかしき」なんともぞ見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞあるや。げにそれもとわり、人の憎むをよしといひ、ほむるをもあしといふ人は、心のほどこそおしはかるる。ただ、人に見えけむぞねたき。

と記して、それは歌題をあつめた類纂的なものでなく、清少納言独自の感想をたわぶれに書きつけたものとあるから、(3)(4)併せて見て、『枕草子』の初稿本は大体現存流布本のごとく雑纂本であつたと考えうる。このことは三巻本などの「物は」「なるものは」という類纂の部分から感想的部分、或いは日記的部分への推移の自然なでもわかる。もとこれらの部分が別冊であつたのが散乱して、後人が今の形に纏めたとしたら、こう自然にはいかなかったと思う。『春曙抄』の本文にはそういう後人の機械的綴じ合わせがあるが、それは伝能因所持本と三巻本を混淆したからで、その不自然さは容易に気附かれる。また臆断になるが、『枕草子』にあらわれている彼女の性格からして、この草子を堺本、あるいは前田家本のよりに整然たる類纂にはしえなかつたと思われる。それに中宮から賜

わつた料紙も『史記』をうつせるほどの相当の分量だつたというから、彼女ははじめから歌題の類纂というような簡単な書物を思い立つはづがない。また現存の『枕草子』の類纂の箇所を見ても、作歌の参考書として作られたものでないことがわかる。それに跋(3)にあるように、彼女はこの草子を公けにする意志は全然なかつたのである。

なお、『枕草子』という書名が跋(1)に由来することは周知のとおりであるが、「枕にこそは(し能因本)侍らめ」の解は學者によつて区々である。これは中宮の御前に伊周公が料紙(或いは冊子)を献上したのを、中宮が彼女に「これに何を書こう。天皇さまは史記という本をお写させになつた」と相談されたので、清少納言は史記——しき——底——枕と咄嗟に連想して、れいの機智で、「上様がしきになさるなら、私は枕にいたしましょう」と答えたので、中宮は「じや、お前に上げよう」とおっしゃつて賜つたということらしい。この史記から底を連想したのは、催馬寮の「貫川」の「ぬき川の瀬々の小菅のやはら手枕。やはらかに、ぬる夜はなくて、親さくる夫。親さくる夫は、ましてはしも、しかしあらば、矢矧の市に杢買ひにかん。杢買はば縁鞋の細底を買へ。さし穿きて上袈と着て宮路通はん」が、典拠とされているのであろう(原田清氏「枕草子の形態と題名について」『文学』第十一卷第六号)。それで清少納言のつもりでは寝具の枕のつもりで言つたのだが、これはむしろ冗談で、枕の連想から「山は」「峯は」「すさまじきもの」「にくきもの」など枕言(題詞)を置いて思うことを書きつける、なるもの文学・物は文学を創始してみようという気になつたのであろう。尤も、そう考える前に跋(4)にあるように類題和歌集でも作るつもりもあつたらうが、『古今和歌六帖』などという立派なそれが